

ベトナム

—多様な暮らしと時代の流れ—

寺本 実

二〇一三年後半、福祉関係の調査で少数民族の人達を少しだけ訪ねる機会があった。筆者は民族研究を専門とするものではないが、調査地方によっては少数民族の人達が多く暮らしているからである。工業化・近代化を推し進め、二〇二〇年には工業国となることを目指すベトナムは、多民族国家であり、五四民族が暮らすとされる。なかでもキン族が人口の八五%超を占める。残る人達が少数民族の人々である。日本の面積の三分の二ほどの国土に多様な文化、暮らしが広がっている。ベトナムの大きな魅力のひとつである。

筆者が訪問したのは、北部東方

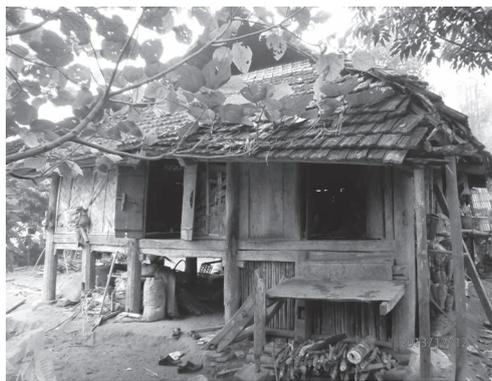
地方、北部西方地方に暮らすムオン族、ヌン族、タイ族、ターイ族の人達である。

●かたち

これらの人々の住居様式には、いくつかの類型がみられた。(1)民族文化にしたがった家屋様式、(2)民族文化にしたがった家屋様式をアレンジしたもの、(3)民族文化にしたがった家屋様式とキン族の住居が併設された地域、(4)キン族の地域でよくみられる家屋様式、である。(1)は、当該民族が継承してきた伝統的家屋様式である。(2)は、長く建築資材として使用されてきた木材ではなく、コンクリートを使用する、屋

根をスレート屋根にするなどのアレンジを伝統的家屋様式に加えたものである。たとえば、木造ではなくコンクリート作りの高床式住居がみられた。(3)は、伝統的な家屋の隣に、キン族の居住地域で見られる、煉瓦を積み上げて作る形式の家屋を併設したものである。(4)は、伝統的な家屋様式を放棄し、上記のキン族居住地域でよくみられる建築様式を選択したものである。

筆者が個人的に最も印象に残ったのは、ムオン族の人達の高床式住居であった。訪問した地域内では最も古いという高床式住居を訪ねる機会があった。どこか包容力を感じられる、存在感のある重厚な木造家屋であった(写真)。



ムオン族の高床式住居 (2013年12月12日 筆者撮影)

ムオン族の人達が高床式住居に暮らす理由としては、以下の理由が考えられるという。(1)蛇などの人間の生活にとつての害獣が家に入ってこないようにするため、(2)涼しいこと、(3)周囲の見通しがきくこと、である。

生活において使用する言語の問題も重要である。これについてもいくつかのタイプがみられた。(1)自身の民族言語を話し、ベトナム語をあまり理解しない人、(2)自身の民族言語もベトナム語も理解する人、(3)ベトナム語を主に話し、自身の民族言語をベトナム語のようには理解できない人、である。(1)のタイプは自身が暮らす家庭、地域から出ることの少ない古い世代の方に多い。(2)、(3)のタイプは、生活上、自身が暮らす地域と外との往来のある人に多かった。

民族衣装に対する対応についてもいくつかのタイプがみられた。訪問時に、(1)民族衣装を着ていた人、(2)民族衣装を着ていなかった人、(3)民族衣装を着ていなかったが、写真を撮らせてほしいとお願いと、民族衣装に着替えた人、(4)民族衣装を着ておらず、写真を撮らせてほしいとお願いと、衣服を着替えた人、

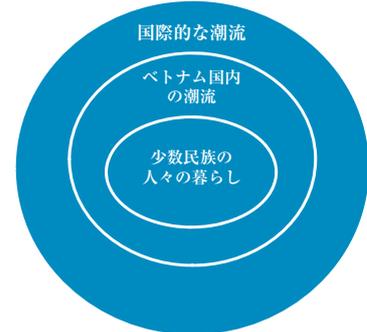
である。人数的には、(1)と(3)よりも(2)と(4)のタイプがかなり多かった。(3)に該当する妙齡のヌン族女性。その表情の変化から、民族衣装を身につけることは、内に秘めた民族のプライドを形として外に示すことでもあるのではないかと感じさせられた。

● 選択

いつの時、どの場における生活でも、大きな時代の潮流が人々の生活の底流、傍らを流れている。また、人々はそれぞれ個々の人格と生活的、経済的、文化的、教育的な条件を持つ。自身を取り巻く環境の変容、自身が生きる時代の潮流をどのように感じ、判断し、それにどう対処、対応、適応をしていくかによって、人々の人生、生活の形は大きく変わってくる。

ベトナムの憲法は、ベトナム公民は自身の民族を決め、母語を使用し、コミュニケーションに用いる言語を選択する権利を持つと定めている(憲法四二条)。少数民族の生活保障の問題は取り組むべき課題のひとつとして、継続的に重視されてきている。民族委員会という専門機関が存在し、関連する各機関と協力しつつ、土地・生

図1 取り巻く潮流と少数民族の人々の暮らし



(出所) 筆者作成。

図2 時代潮流への適応



「原型」固守 ← → 「原型」放棄

(出所) 筆者作成。

活水などの生活インフラの整備、医療保険の支給などの生活向上、改善のための支援策が実施されている。

民族の伝統を「原型」とするならば、その時代における国際的、国内的潮流、生活環境の変容に対する、個々が持つ条件に基づいた人々の対処、対応、適応の結果が、先に記した少数民族の人々の生活上のいくつかのヴァリエーションとなつて現れているのではないかと考えられる(図1参照)。どのような時代潮流下、生活環境の変容下であろうとも、断固としてその「原型」を守ろうとするのか、それとも「原型」を捨て去って完全に適応をはかろうとするのか。この両極端の選択肢の間のどこかの地点に、少数民族の人々の実際の選択肢が存在している(図2参照)。

工業化・近代化を推し進め、二〇二〇年には工業国となることを目指すベトナムは、変化のただなかにある。この方向性は世界の趨勢に沿ったものである。この文脈において、ベトナムは益々成長していくに違いない。ベトナムの人は、取り巻く環境を含む自身が持つさまざまな条件に基づき、取

り巻く潮流下、変わりゆく生活環境下において、自らの生活の形を「選択」している。会う機会を得た少数民族の人達から、それを目にみえる形で教えていただいた。「何かを得れば何かを失う」とベトナム戦争時に従軍記者として活動した開高健さんが述べていたことを、筆者はよく思い出す。たとえそうだとしても、ベトナムの人達には積極的な意味で、自身にとって大切なもの、失いたくないものを守りながら、未来を切り開いてほしい。

(てらもと むのる／アジア経済研究所ホーチミン海外研究員)

【付記】

本稿はアジア経済研究所ホームページに掲載された海外研究員リポート(二〇一四年四月)に若干の加筆修正を加えたものである。本誌への掲載をご提案下さった真田孝之氏に対し、記して感謝申し上げる。